

平成21年5月22日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520381
 研究課題名（和文） インターネットを利用した英語の結果構文についての意味統語論的研究
 研究課題名（英文） A Semantico-Syntactic Study of Resultative Constructions by using Internet
 研究代表者
 大庭 幸男
 大阪大学・文学研究科・教授
 研究者番号：90108259

研究成果の概要：

本研究では、英語の結果構文について実際の言語使用状況をインターネットの検索によって調査し、次の2点を明らかにした。

- (1) 結果構文に生起する動詞の種類とこの構文の意味統語的特徴
- (2) 結果構文に生起する動詞と結果句の選択制限

上記に加えて、(1)と(2)に基づいた結果構文の統語構造を提示し、その妥当性を検討した。また、結果句として論理的に同じ意味合いをもつ形容詞句と前置詞句が結果構文に生じる場合、これらの結果句をとる動詞の意味的特徴を調べて、この2つの結果構文の意味的なニュアンスの違いを示した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	600,000	4,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：結果構文、結果述語、結果句、非能格動詞、非対格動詞、他動詞、小節、直接目的語制限

1. 研究開始当初の背景

(1) 一般に、物事の事態を表すのに学校文法における第3文型(SVO)が用いられる。たとえば、ウェイトレスがテーブルを拭いたという事態やキャロルがトーストを焼いたという事態を表す場合、次のような表現を用いる。

- 〈1〉 a. The waitress wiped the table.
 b. Carol burned the toast.

これらの文は、動詞が表す行為によって影響

を受けた目的語がどのような結果状態になったかについて何も表現していない。しかし、場合によっては目的語のテーブルやトーストがどのような状態になったかを示す必要がある。結果構文はそのような場合に用いられる。

- 〈2〉 a. The waitress wiped the table dry.
 b. Carol burned the toast to a crisp.

〈2a〉はテーブルを拭いた結果それが乾いた

ことを表し、〈2b〉はトーストを焼いた結果それがカリカリになったことを表す。したがって、〈2〉の dry や to a crisp は目的語の結果状態を表し、結果句と呼ばれる。

(2) 海外では、Carrier and Randall (1992), Levin and Rappaport Hovav (1995), Simpson (1983), Hoekstra (1988), Langacker (1991), Goldberg (1995) など結果構文が研究されている。また、国内の英語学や言語学の分野でも、結果構文について生成文法や認知意味論や構文文法などの理論的な枠組みの中で分析されてきた。しかし、これらの理論ではこの構文の構造や、結果構文が用いられる場合の事態認知を明らかにするものである。そしてその際にとりあげられる例文の数はごく少数に限られている。

(3) 本研究は、結果構文についてデータ中心の研究を行うことにその特色がある。具体的には、上述したように、インターネットを利用して、膨大な量の言語資料から結果構文に生起する動詞を検索し、この構文で実際に使用されている状況を調査し、結果構文を統語的な側面と意味的な側面から分析をおこなった。

2. 研究の目的

(1) 英語の結果構文については、これまで生成文法、認知意味論、構文文法などさまざまな理論的な枠組みで研究されてきた。しかし、そこで取り扱われている例は、少数の動詞や結果句を伴う例に限定されており、どのような動詞がどのようなタイプの結果句に結びつくのかについての全体像が把握しにくい。特に、非対格動詞と非能格動詞を伴う結果構文の使用状況についてはこれまであまり研究されていない。そこで、本研究では、実際の言語使用状況をインターネットによって調査し、次の2点を明らかにすることを目的とした。

- 〈3〉結果構文に生起する動詞の種類と結果構文の意味統語的特徴を明らかにする。
- 〈4〉結果構文に生起する動詞と結果句の選択制限を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) インターネット上でオンラインにより検索できる British National Corpus にアクセスできる環境を構築した。また、その他のオンラインで利用できる言語資料を検索できるような環境も整えた。

(2) 具体的な作業は、結果構文に生起する他動詞をはじめ、非対格動詞、非能格動詞を著

書や研究論文に示されている言語資料を調査し、データを収集した。また、上記の言語コーパスを検索して、どのような動詞が結果構文に用いられるかを調査した。

(3) このように得られたデータをもとに、結果構文に生起する動詞の意味統語的な特徴を探った。さらに、どのような動詞がどのような範疇の結果句を選択しているかについても分析し、その選択制限を明らかにすることに努めた。

4. 研究成果

(1) 初年度は、結果構文に生起する他動詞について研究を行った。まず、先行研究で取り上げられている結果構文の例を収集した。次に、得られたデータを詳しく分析し、どのような範疇の結果句が用いられているかを動詞別にリストアップした。その後、British National Corpus に検索をかけ、上記の以外の他動詞を伴う結果構文をデータベース化し、どのような動詞がどのような結果句と共に結果構文に用いられるかを調査した。その結果、物を変形させることを示す動詞（例えば、shatter, tear など）は前置詞句 (PP) を選択し、物にある行為をおこなう動詞（例えば、crush, pound など）は前置詞句 (PP) と形容詞句 (AP) を取ることなどが分かった。

(2) 翌年度は、著書や研究論文に目を通して、そこで例示されている非対格動詞を伴う結果構文の例を収集した。また、上記の British National Corpus にアクセスして、結果構文に生起する非対格動詞の例を抽出した。さらに、これまで得られたデータと先行研究の成果をもとに、結果構文の構造について論考を深め、2つの論文を書いた。

まず、1つの論文では、最新の生成文法理論であるミニマリスト・プログラムの枠組みで、結果構文の意味的・統語的な特徴を説明するために、1つの構造を提案した。この構造の特徴は、動詞句 VP が2つに分割されており、下の VP の指定部、主要部、補部にそれぞれ目的語、動詞、結果句が生じ、上の VP の指定部、主要部にそれぞれ、その目的語と動詞が移動するという点にある。目的語が下の VP 指定部から上の VP 指定部に移動するのは、格の照合のためである。

この構造を支持する例として2つあげた。1つは、いわゆる直接目的語制約の効果に関わるものである。

- 〈5〉 a. *The winemakers stomped on the grapes flat.
- b. The winemakers stomped the grapes flat.

〈5a〉では、下の VP 指定部にある on the

grapes は上の VP 指定部に移動できない。なぜなら、grapes は前置詞の on によって格付与されているからである。これに対して〈5 b〉では、目的語の grapes が繰り上がり、適切に格照合される。その結果、〈5 b〉のみが文法的になる。

もう1つの証拠は、数量詞遊離現象に関するものである。

〈6〉 a. The gardens watered the tulips all flat.

b. She pounded the cookies both flat.

〈7〉 The Jogger ran his Nikes both threadbare.

この現象は、all, each, both などの数量詞がそれが修飾する名詞句から遊離するものである。これについてはこれまで多くの分析が提案されているが、例えば Sportiche (1988) は、文の主語は動詞句内で基底生成され、表層構造で IP 指定部に移動するという仮説（いわゆる、動詞句内主語仮説）を採用して、数量詞遊離現象を説明している。

Sportiche (1988) の分析が正しければ、〈6〉、〈7〉はそれぞれ〈8〉、〈9〉のような派生構造をもつことになる。

〈8〉 a. The gardens watered [the tulips]_i [all t_i] flat.

b. She pounded [the cookies]_i [both t_i] flat.

〈9〉 The Jogger ran [his Nikes]_i [both t_i] threadbare.

〈8〉、〈9〉では、目的語が移動するさい、数量詞だけが移動せずにもとの位置にとどまっている。ここで重要なことは、結果構文の動詞に続く名詞句が基底生成位置ではなく、繰り上がった位置で認可されるということである。本稿で提案した結果構文の構造では、このことを自動的に捉えることができる。

もう1つの論文では、このような結果構文の構造とこれまでの先行研究で提案されていた結果構文の構造を6つの点に焦点をしばって比較検討し、どれがもっとも妥当な結果構文の構造であるかについて論じた。

結果構文については、これまでさまざまな分析が試みられているが、ここでは主に結果構文の統語構造を議論した3つの分析をとりあつかった。すなわち、3項枝分かれ分析 (Carrier and Randall (1992)) と機能範疇 PrP (Predicate Phrase) を用いた分析 (Bowers (1997)) と上記の分析 (Oba (2007)) である。Carrier and Randall (1992) の分析の特徴は、結果構文の動詞の種類に関係なく、動詞とそれに続く名詞句と結果述語はすべて姉妹関係にある、すなわち、結果構文の動詞句は3つに枝分かれていることである。また、Bowers (1997) の分析の特徴は、PrP を用いて結果構文の動詞と結果句が小節を形成する

というものである。

本論文では、(i) 他動詞の目的語と動詞句の付加部に含まれている要素との照応関係、(ii) 結果構文の動詞と結果句の意味的・統語的選択制限、(iii) 結果構文の直接目的語制限、(iv) 数量詞遊離現象、(v) 結果構文の等位構造、(vi) 他動詞を伴う結果構文で、それに続く名詞句がその動詞によって選択されない場合について、これら3つの分析を比較検討した。

結論的には、収集したデータを見る限り、本研究論文で提案されている構造がもっとも妥当性が高いことを示した。

(3) 最終年度は、非能格動詞を伴う結果構文の統語的特徴をみたのち、動詞と結果句の間に見られる意味的關係を考察した。

また、結果句として形容詞句が生じた場合と前置詞句が生じた場合とでは、どのような意味の違いがあるかについて考察した。取り上げる結果句は「死んだ」を意味する dead, to death と「眠くなる、眠った」を意味する sleepy, to sleep である。

具体的な作業は、インターネット上でオンラインにより British National Corpus にアクセスして、結果構文に生起している結果句の dead, to death や sleepy, to sleep を検索した。さらに、これらの結果句に生起する動詞の種類とその頻度数を網羅的に調査した。

まず、結果句 dead, to death のデータから次のようなことが分かった。dead を結果句にとる動詞の数は11であるのに対して、to death を結果句にとる動詞の数は85である。前者は後者に比べて動詞の種類が限定されている。

また、動詞の使用頻度数を見てみると、dead をとる動詞では shoot が全体の使用頻度数の92%を占めている。その他 cut が11%であるが、それ以外の動詞は10%以下である。これに対して、to death をとる動詞では、stab, beat がそれぞれ18%, 11%を占め、それ以外の殆どの動詞の使用頻度は10%以下であり、さまざまな動詞が幅広く用いられている。

さらに、dead をとる動詞の代表例として shoot の意味的な特徴を見てみると、この動詞は相手の命を直接的に奪うことを意味する。shoot の具体的な例を見てみよう。

〈10〉 a. Israeli soldiers shot dead three Palestinians and injured more than 60 others.

b. GUN shop assistant Peter Lamb shot dead an armed robber who threatened to blast his boss with a sawn-off shotgun.

たとえば、〈10a〉は、イスラエルの兵士が3人のパレスチナ人を銃で撃って殺したこ

とを表し、〈10b〉はガンショップの店員が武装した泥棒を銃で撃って殺したことを表している。銃を撃って死なせるというのは、通常直接的な行為の結果であるので、deadのような形容詞句は動詞の表す行為の直接的な結果状態を表すと考えられる。

これに対して、to deathをとる動詞として stab, beat の意味特徴を見てみると、これらの動詞の表す行為は直接死と結びつくのではなく、時間を要して死に至らしめうるものである。

〈11〉 a. Without hesitating she stabbed him to death with an ebony & rehy; handled knife, then waited patiently to be arrested.

b. And I am not talking about the drunken louts who beat their wives to death in a cellar.

たとえば、〈11〉の動詞 stab や beat は「先の尖ったもので刺す」「物でたたく」ことを意味し、この行為だけでは死に至るとは限らない。これらの動詞が結果構文で用いられるのは、このような行為を行った結果、時間の経過により目的語の人物が死に至ったことを表すからだと考えられる。

次に結果句 sleepy, to sleep のデータから分かることがいくつかある。まず、sleepyをとる動詞は make のみであるのに対して、to sleepをとる動詞の数は16であり、後者が圧倒的に多い。

また、動詞の使用頻度数を考えてみると、sleepyをとる動詞は make しかないが、to sleepをとる動詞では、put, cry がそれぞれ64%, 24%で使用頻度数の大半を占めており、それ以外の動詞は10%以下である。

さらに、動詞と結果句の関係を考えてみると、形容詞句 sleepy は通常 I become sleepy. や He looks sleepy. など用いられることが多い。これに対して、結果構文では、次の例のように make を伴う例が観察される。

〈12〉 The heavy lunch and the wine had made her sleepy, and she took to her bed the minute they returned, only awakening when the hunger pangs assaulted her stomach, to see that she had been asleep for over three hours.

この例では、結果句 sleepy は「たくさんのランチを食べ、多くのワインを飲んだ」ということが直接的な原因で彼女が「眠くなった」という結果を表している。

一方、前置詞句 to sleepをとる動詞 put, cry の意味的特徴を考えると、これらの動詞の表す行為は to sleep という状態と直接関係がない。具体的な例は以下の通りである。

〈13〉 a. In the flat land of the Delta the

babies cry themselves to sleep in the airless shade, while everyone else labours in the scintillating sun.

b. I still put myself to sleep by thinking about not lying on a cold pavement covered with newspapers.

たとえば、〈13a〉では、赤ちゃんが泣いていて、そのうちに泣き疲れて眠ってしまったことを表す。眠ったのは、泣くという行為の直接的な結果ではなく、泣くことで疲れてしまったことによる間接的な結果である。

このように、同じ結果状態を示すにもかかわらず、形容詞句と前置詞句の場合では、動詞による影響の仕方が異なることが分かった。このような動詞と結果句の意味関係は、次の仮説を立てることによって説明できるのではないかという結論を得た。

〈14〉 形容詞句は動詞の表す行為の影響を受けた目的語の直接的な結果状態を表すのに対して、前置詞句は影響を受けた目的語の間接的な結果状態を表す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

①大庭幸男、「結果構文の動詞と結果述語の意味特性について」、『玉井暉教授退官記念論文集』、印刷中、2009年、査読無し

②大庭幸男、「結果構文の統語的特徴とその構造について」、『Cairn 特集号』、50号、261-280、2008年、査読無し

③大庭幸男、「英語の基本文型の見直し」、『英文法研究と学習文法のインターフェイス』、199-224、2007年、査読無し

〔学会発表〕(計1件)

①大庭幸男、「英語の基本文型の見直しについて」、ワークショップ『英文法研究と学習文法のインターフェイス』(於東北大学)、2006年8月4日、東北大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大庭 幸男 (OBA YUKIO)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：90108259

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし